4）その他の調査

（1）農山漁村・母子家庭への支援

現在子育て支援の場とされる多くの「ひろば」は都市に設置され、その内容もいわゆる普通の家庭の、専業主婦による在宅の子育てを支援することが中心に構成されている。子育て支援は、それぞれの地域で誰でもが共通して受けられる普遍的なものであることが望ましいとの考えから、ひとり親家庭および農山漁村を視野に入れて調査を試みた。

少ない資料からではあるが、都市型ではない農山漁村に求められる支援および母子家庭に求められるものは何かについて、考えてみた。

農作業に従事する若い母親たちは以前より減少して、子育てに専念するものが多くなっている。その育児はマニュアルや育児書頼みで、他と比較して悩み、孤立して煮詰まってしまう状況があるようだ。農作業に従事する場合は、とくに妊娠出産の安全や快適さを保障し、不安を解消する必要性があると指摘があり、妊娠初期からの支援の必要性が示唆される。農繁期には大人に休日はないことから、保育や学校が休みのときの過ごし方が悩みになっているという。三世代家族で母親が学習参加のためには外出しにくい実情が読み取れる。

支援の場が整備されていない中での提案として、公共の場を利用して高齢者の出番を作って子どもと一緒に過ごす、ふれあうことで地域の子育て力を高めるというものがあった。

農山漁村は自然環境に恵まれながら、その恩恵を受けない生活をする子どもが多い状況があるとされているが、支援者からは農作業を通した支援の勧め、農繁期の保育支援の必要性、高齢者や父親の力を借りること、親同士が気兼ねなく集まれるひろばの必要性などが提示された。祖父母との同居が多く、育児を分担する祖父母との葛藤、閉鎖的とされる家庭内で周囲とは孤立しやすい育児、母親の農作業への従事など農山漁村独特の環境での子育てには、都市型にない支援が必要である。

（2）農山漁村（JA）およびひとり親家庭（MC）の母親への調査から

支援の場で利用しているのが両群とも公園であるが、ＪＡ群はひろばや園庭も利用しているのに対し、ＭＣ群は習い事や親戚の手を借りるなどになっている。利用しているサービスは、両群とも子育て相談や一時保育などを多様に利用しているが、ＪＡ群の多くがひろばを利用し、ＭＣ群が子育て相談を利用している点が対照的で、ひとり親に相談ニーズが高いということが了解できる。相談相手にはＪＡ群が夫を第１に、また義理の親を挙げているのを除き、両群とも親と友人を挙げている。

ＪＡ群の多くが子どもの同年齢の友達を希望しているのに対して、ＭＣ群が悩みを相談できる場や人を挙げている点が対照的であり、ひとり親に対する個人的支援の必要性が示唆される。

父親にかかわる項目に対して、ＪＡ群は労働時間の短縮を半数が挙げ、育児休業の充実、父親の意識を変える講座を希望するなど、他群の回答者と類似した結果が示された。

（3）母子家庭支援にかかわる意見から

①仕事と子育ての両立のための保育

多くのひとり親はまず生活の建て直しが必要で、就労は重要であり支障なく働ける条件は欠かせない。ひとり親は手替りがない分、保育の充実とともに病気時の対応が求められる。

②高い相談へのニーズ

障害児を抱える人もいて精神的支援も重要である。相談の場があって話を聞いてもらうだけで気が楽になる人も多い。やはり相談の充実が望まれる。

子育てに関してはより支援を必要とする親子である。支援策というものは、普通につまり誰でもが当たりまえに、必要

なときに必要なことを支援される体制にあることが肝要である。

（4）保育所地域子育て支援センターのヒアリング調査

Y市における研修講座や園長たちの勉強会の中で、公立保育園園長や保育士からヒアリングを行った内容を報告したい。

①一時預かり保育について

一時保育は母親の病気や通院、パート就労、緊急時、そして親自身の時間をとるために必要である。しかし保育現場は少子化であってもかつての定員を超える子どもを受け入れていることが多く、困難を伴う。

②父親が子育てに参加するための支援

父親の出番を作ったり参加しやすい活動を準備する、花壇や畑作りなどを設定して参加してもらい、評価し自信をつけてもらうなどがよいのではないか。

③地域の人々や親子との交流活動

地域の親子に園庭を開放し、人形劇など公開にしている。小中学生が体験学習のために来園する、高校生は夏にボランティア活動として訪れる。

④子育て相談

電話相談、面接相談、園庭開放の中で子どもを遊ばせながら相談、園に見学に来た人からの相談を受けている。リピーターの親からは何回でも時間をとって聞く。保護者に安心感を与えて事態を深刻にしない予防的な役割を果たしている。

⑤園における支援で配慮すること

ⅰ支援事業と通常保育の兼ね合い

園庭開放など、参加者が多いと在園児にしわ寄せがきやすいので土曜日の開放が望ましい。

ⅱ支援担当職員

専従の職員がほしい。回を重ねることで信頼も築ける。兼務は片手間になりやすい。専任の職員とそれを理解し受け止める全職員の存在が大切である。

ⅲ個別的な対応の必要性

親の困り方には個人差があり、その違いに対応することが必要。何カ国かの親子が在籍する園もあり、国別に支援内容を変える必要もある。

ⅳちょっとしたアドバイス

日ごろのちょっとしたアドバイスが求められ、それだけでも安心される。

ⅴ支援事業のための時間をつくる

土曜日や平日の午後などに時間を設定するのも一つの工夫。いつもゆっくり向き合えない場合、短い時間でも向き合う時間を設定することで、見えてくることもあるだろう。

ⅵ増えていく行政や保護者の要求

行政と保育士、保護者と保育士、行政同士でも考え方にギャップがある。会社や職場にも子育てへの理解を求めることが必要ではないか。

（5） 児童館への調査から

かつて学童向けに設置された児童館も乳幼児親子向けの支援の必要性に迫られている。15年度には児童館への調査を行い、親子で気軽に遊びに行ける、仲間作りができる、ほっとする時間と場を求めていることが示された。それに答える実践がある一方、全国的には子育て支援を行わず、また場の提供にとどまるところも少なくない実情も分かった。

その中で先進的な児童館活動として京都市児童館の取組みに注目し、訪問調査を行った。プログラムには、「子どもの遊びの復権」、「人権の尊重」、「ノーマライゼーションの推進」があり、活動指針テーマでもある。「幼児クラブ」「母親クラブ」も同様に児童館活動に大きく位置付けられている。子育て家庭支援のニーズに対応した事業としては、「子育て相談」、「地域ふれあい事業」への方向性を目指した活動を模索していた時期でもあり、何れの児童館でも新しい事業の展開を試行している状況がうかがわれた。

2．ひろばにおける子育て家庭支援プログラムの作成と再編

1）プログラム作成の概要

（1）プログラム作成の経緯

本研究では、初年度、ひろばにおける子育て家庭支援プログラム作成を中心に研究を行った。プログラム作成にあたっては、子育て支援者および子育て家庭へのアンケート調査に加え、先進的な取り組みをしているひろばへの視察およびヒアリング等を行った。それらの調査を踏まえ、必要と考えられるプログラムの試案作成を行った。

次年度の研究では、この試案プログラムについて、実際にひろばで実践してもらい、実施可能なものとするための検証、修正を行った。その結果として、プログラムの提案を行った。

（2）提案プログラム

最終的には、以下のプログラムの提案を行った。

①常設でノンプログラムのひろば
②プレママ・マタニティプログラム
③一時保育・相互預けあいプログラム
④親のエンパワーメントプログラム
⑤父親支援プログラム
⑥学生の子育て支援プログラム
⑦中高年世代との交流プログラム
⑧アウトリーチプログラム
⑨企業との連携プログラム
⑩ひろばでの相談
⑪情報提供プログラム
⑫児童館での支援プログラム
⑬特別なニーズへの対応プログラム
⑭支援者の研修プログラム

（3）プログラムについての基本的な考え方

これらのプログラムは基本的には子育てひろばを基盤として考えている。ここでの「ひろば」（ドロップイン）とは、親子がいつでも気軽にふらっと訪れることのできる安心感が持てる場所である。それは、親子にとっての本当の「居場所」となる場である。そのためには、週に3日以上は開かれている常設の場であることが必要となる。また、そこは単なる「屋根付き公園」であってはならない。そのためには、そこにはスタッフがいて、親子が本当に安心して過ごせる場とするために、家庭的な温かい雰囲気を作り出し、親にとっても子どもにとっても豊かな環境が構成され、そこで出会った親子が自然と無理なくつながる場となるような工夫がなされる必要がある。そのような、単なる場の提供だけではなく、親子が生き生きと過ごす場としての質的な充実が求められる場である。

そのため、プログラムの第一に「常設でノンプログラムのひろば」を提案したのである。そこには、「常設であること」「ノンプログラム」「環境設定」「情報を得る場」「人の中で学ぶ」「スタッフの役割」というポイントを示した。

もちろん、ひろばを基盤としない場での活用も可能である。しかし、ここに提案したプログラムの多くは、ひろばを基盤とすることで、実に有効に機能すると考えられる。例えば、学生や中高年世代、あるいは障害を持った方、マタニティの方々との交流の場として考えた場合、そこには基本として日常的に集う親子がいることで多様なかかわりを生み出す場となることが可能になる。プログラムだけを切り取って考えると、それは非日常的な「イベント」性の強いものとなってしまうだろう。つまり、「居場所」機能と「ネットワーク」機能はうまく組み合わせることでより豊かに展開することが理解できるのである。

情報に関しても同様である。単にインターネット上、あるいは掲示板上の情報だけではなく、そこに集う親子との交わりの中で情報交換がなされるならば、それはさらに血の通った豊かな情報となるであろう。

相談機能についても同じである。多くの親たちの相談したい内容は、非常に日常的な内容であることが多い。それはあえて専門家に1対1で相談するまでもないことが多く、ひろばの中で親同士の気軽な話や、先輩ママとの話、他の子どもの姿見たり聞いたりすることで簡単に解決してしまうことが多い。それで解決しない場合でも、ひろばで気軽に話しのできるスタッフや専門家がいれば、もう一歩立ち入った相談も可能である。ここに親子が日常的に気軽に集えるひろば機能の意義がある。

こうして考えると、ひろば機能を基盤としてプログラムを捉えていくことの意味は非常に大きいのである。

また、「プログラム」というもののもつ性格上、何かこのプログラムを実施する（こなす）ことで、よい効果が得られるという誤解を生みやすい。むしろ、大切なことは、このプログラムをどのように運用すれば、子育て支援として意味あるものとして機能するのかという問いが必要なのである。プログラムを実施する上で、子育て支援とは誰のためのどのような支援なのかという視点を十分に踏まえ、子育て支援としての効果を十分に考慮して展開されることが求められる

2）プレママ・マタニティプログラム

プレママ・マタニティプログラムは、「日常的なひろば体験」および「助産師さんを囲んでのグループ相談」を提案している。ここでは、「日常的なひろば体験」のみをとりあげる。

＜日常的なひろば体験＞

○実施方法

①対象

出産を控えた妊婦とその夫

②募集

主に保健所・保健センターで行われている両親学級などで広報し、勧誘を行う。

「赤ちゃん誕生をひろばのみんなが楽しみに待っています。遊びにきてください。出産前後、困ったこと、心配なことについては先輩ママ、スタッフ、子育てのパートナーとなるボランティアさんがいつでもお待ちしています。赤ちゃんのお誕生前に赤ちゃんを身近に感じ、一緒に遊んだり、先輩のお母さん方から、あんな時こんな時のお話を一緒にしてみましょう。」といったお知らせを作成しておく。

できれば直接ひろばスタッフが両親学級に出向き説明をする。地域に共に育てあうひろばがあることと、ひろばの活動内容をお知らせする。

また地域の産婦人科を回り、ひろばの案内パンフレットと共にプレママのひろば体験へのお誘いチラシをおいてもらう。

③開催

基本的に来所はいつでも可とする。しかし、プレママ同士の交流や知り合う機会ともなるので、月に1回～2 回程度日を設定したりおしゃべりタイムのようなものを作ったり、きやすくするきっかけを作る。

④活動の進め方

あそびのひろばの中に自由に入ってもらい、他の親子と身近に接する。スタッフあるいはボランティアが案内をし、必要と思われるプレママには、一緒に寄り添いながら他の親子を紹介し、赤ちゃんを抱くなどの体験をしてもらう。

⑤帰りの際には、プレママひろば体験の感想を短時間でもよいので、スタッフ、ボランティアと共に懇談し、皆で出産を待ち望んでおり、子どもと一緒の来所を楽しみにしていることを伝える。

⑥一回だけの参加で終わるのではなく、フォローアップとして継続的につながりがもてる様、出産前でも参加出来るプログラム（例：赤ちゃんマッサージ、お話会など）があれば参加を誘ったり、ひろばのお知らせを郵送していく。

○発展型

プレママ体験のプログラムと0歳児の

母親の「ホッと一息　ひとりでティータイム」といった企画を同時に組み、プレママがスタッフ、ボランティアと共に子どもを短時間預かり、赤ちゃんの休息を兼ね、お茶を飲みながらゆっくりと過ごしてもらうといった双方にとって有意義な時間となるような工夫もあるとよい。

○留意点

① まず始めにスタッフによる、ひろばの説明や、案内を丁寧におこない、ひろばに入った際には、プレママの参加者とわかるように、エプロンや名札をつけてもらう。プレママ参加者と周囲からわかることで、話しかけてもらうきっかけにもなる。

② すべてのスタッフとボランティアにも紹介しておき、他の母親との話ができる橋渡し役となるように留意する。

③ 参加したプレママの近所に、ひろばに通っている先輩親がいれば、了解を取って紹介しておく。困ったときの連絡先に持っているだけでも安心してもらえる

④ このプログラムには助産師や保健士の協力が欠かせない。常日頃より良好な関係をつくっておくことが必要。

3）一時預かり・相互預かりプログラム

「一時預かり」および「相互預かり」のプログラムを提案している。ここでは、「相互預かり」のプログラムのみをとりあげる。

＜相互預かり＞

○実施方法

①対象

ひろばを利用者で、「相互預かり」がセットの親向けの講座などのプログラムに参加を呼びかけ、希望してきた親子。

②進め方

ｉ参加希望者の中からペアを作る。

ペアの組み方には、２通りが考えられる。プログラムへの参加希望段階から２組がペアになって参加する場合と、参加希望者の中からスタッフが、相互預かりの効果を考えてペアを作る場合である。

ⅱ自分でペアを作って参加する場合。

顔見知りや安心して預けあえる関係なので、気軽に参加できるというメリットがある。普段は仲がよくても、預け合うまではいかない場合もあるので、より関係が深まるという効果が期待される。

ⅲスタッフのほうでペアを作る場合。

普段は知らない親子と知り合いになるきっかけとなるなど、新しい出会いやつながりを生み出す効果が期待される。

・同じ年齢や、住んでいるところが近いなどの共通点の多い者同士をペアにすると親しくなりやすいという利点がある。逆に子どもが異年齢のペアを作ることにも良い点がある。

・３歳児の親が０歳児を預かることで自分の子どもが０歳の頃を懐かしく思い出すなど、３歳児にとっても赤ちゃんに触れる良い機会になる。０歳児の親にとっては少しお兄さんお姉さんの子どもに接することで、この先の発達の見通しを持てるようになる。

・それぞれの利点を知った上で、普段の利用者の様子を良く知っているスタッフが良い出会いとなるようにペア作りすることが必要である。

・ひろばの親子の置かれた状況から判断して、ペアで参加してもらうか、スタッフがペアを作るかの２通りの方法を使い分けることが望ましいと考えられる。

具体的な展開として例を挙げる。

③活動例１（基本型）

ｉひとつのプログラムの参加人数は１０組程度。同じプログラムが２回に分けて構成され、ペアのどちらかが前半、もう一方が後半に参加する。参加しない親が、ペアの参加している親の子どもと自分の子どもをひろばで見る。

ⅱ３～４人のスタッフがサポートに入ることが望ましい。プログラムの時間は４

０～５０分以内が適当。お茶やリラクゼーションなど、親自身が子どもを預け、ゆっくりとした時間をすごすことのできる内容が良い。
ⅲ最初と最後にペア同士が話し合う場を持つ。自分の子どもを預かってもらう際に、伝えたいことを伝える。スタッフの担当を決めておき、何かあったらサポートすることを伝えておく。最後には預かっているときの様子などを報告しあう。その場に、担当となったスタッフも同席する。
④活動例２（短時間型）
ｉ短時間の単独で参加するプログラムでの「相互預かり」。例えば１５分のハンドマッサージなどに一人ずつ交代で参加する。
ⅱプログラム１よりも短時間であり、初めて子どもを預ける場合や、親子がまだひろばに来て日が浅い場合、ひろば側で「相互預かり」のサポートに付く人員の足りない場合などにも実行可能なプログラムである。短時間であるため、親も参加しやすいと予想される。最初と最後の話し合いはプログラム１と同様である。
⑤活動例３（グループ型）
ｉプログラム１と同様の形態で、ペアに分けずに、５人の親が１０人の子どもを見る方法。スタッフが３～４人。この方法には子ども同士、親同士のかかわり合いがあるなど、集団のおもしろさがあるが、このプログラムを行うために、１室区切られた空間が必要となる。

○留意点
① わが子を預けるのがはじめての親子が多いため、預かる親が負担を感じたり、預けられる子どもに無理がかからないような工夫が大切となる。特に、預かる場所、スタッフの助け、時間などきめ細やかな配慮が必要である。
② これまで預け合いを経験していない人が、このプログラムに参加してみようと思うことは、大きな決断である。そのような決断をしたものの、預かった子どもや自分の子どもがずっと泣いたり、怪我をしたり、機嫌が悪くなったりして、悲しく負担の多いものとなることを、できる限り回避する必要がある。
③ むしろ、この預け合いを行うことで、子どもを見合うのはおもしろい、楽しみであると受け止めてもらうよう、スタッフの配慮が必要である。プログラムにあるように、５ペアにスタッフが３～４人付くのは、非常に多いと感じられるかもしれないが、それだけ手厚いサポートが必要不可欠なのである。
④ 親子の様子を見守り、必要なときには手を貸し、必要のないときには離れて見守るような熟練したスタッフの存在が必要である。「相互預かり」の後に、スタッフ間でミーティングを持ち研鑽を積むことが、プログラムの質を高めていく上で求められる。
⑤ このプログラムは、単に講座の合間に預け合いを行わせることが合理的だという性格のものではない。あくまでも、親同士が預けあうことを通して、自分の子育てに新たな発見をすることや、子育てを共にしていくことの喜びや安心感が得られることが目的である。そのような親同士の支え合いを、その下からサポートするのが、このプログラムを行うひろばスタッフの役割である。

４）親のエンパワーメント

親のエンパワーメントとしては、「親により自主企画講座」「グループワークーノーバディズパーフェクトを応用して」を提案している。ここでは、「グループワーク」のみを取り上げる。

＜グループワークー「ノーバディズ・パーフェクト」を応用してー＞

○目的

日ごろ気になっていること、困っていること、考えてみたいこと、人と話し合ってみたいこと、疑問に思っていること等々、人はいろいろな悩みや課題を抱えて生活をしている。

子育てひろばなどで、親に関心やニーズのありそうなテーマを設定し、そのテーマに集まった親のグループで話しあいを行う。悩みを話し、聞いてもらって気持ちの整理をする、また人の話からいろいろな知恵やアイディアをもらい、自分の課題解決に参考となるヒントを得てもらうことを目的とする。

○実施方法

①テーマの設定

子どもとのかかわり方で「反抗期の子どもと向きあい方」「上手なしかり方ってあるの？」「食事について」など。家庭内の人間関係で「子どもと気持ちが通じあうコミュニケーション」「お兄ちゃんお姉ちゃんとの向きあい方」「パートナーとのコミュニケーション」「おじいちゃん・おばあちゃんとの関係」など。親自身について「お父さんの子育て」「私ってどんな人？」など、親の関心が高そうなテーマとする。

②時間と回数

１回の時間を１時間半から２時間とする。１テーマについて同じメンバーで話しあいを続け、変化しながら気づきを得ていくために、連続３～４回のシリーズとする。

③人数と募集

テーマと開催の回数とその日時を示して、参加者を募集する。８人程度、３～４回のシリーズに出席できる人が望ましい。

④託児とその担当者

親同士がゆっくり話すために託児を行う。親から子どもの状態、希望することを記入してもらい、できれば１対１に近い担当者をつける。受け渡しは丁寧に行い、終了後には託児中の子どもの様子を伝える。連続講座なので、回ごとに同じ子どもに同じ担当者がつくことが望ましい。地域のボランティアにも協力を依頼して託児の担当者を確保しておくとよい。

○セッションの進め方

セッションを担当するファシリテーターが進行を務め、次のように進める。

①アイスブレーカー

初めに、互いに知りあい緊張をほぐすために、自己紹介を兼ねて「私の好きな～」「私を～に例えたら」など、「私」をテーマにした簡単なコメントをそれぞれにしてもらう。初めて会うもの同士でも、声を出すことによって、その後の参加や発言がしやすくなる効果が期待できる。

②決まりごと

セッションに安心して参加できるように約束事を決めておく。まずはここで出た話はここだけのこととしよう、と安全な場を提案して参加者の了解を取る。

そのほか参加者が不安に思っていること、みんなに頼んでおきたいことなどを出してもらう。出された項目はみんなの合意事項として大きな紙に書いて張り出しておく。次回以降にも張り出して、追加項目が出れば書き足していく。

③テーマの展開

最も時間を使う、中心となる活動である。決めてあったテーマについて、思っていること、困っていることを、話したい人から自由に話してもらう。順番や、指名によって話してもらうことは避けて、話したそうな人が自発的に話すのを待つようにする。

話し合いだけでなく、テーマについて考える機会を提供する、たとえば出てきた話の場面をロールプレイで演じてみる、実際の子育て場面を検証する項目を考える、考えの似たもの同士が小グループになって話しあい、元のグループに戻って発表するなど、さまざまな活動を入れると、互いの気づきや学びを深めることができる。

話が行き詰ったとき、判断に迷うときなどに、「ノーバディス・パーフェクト」のテキストを開くと、子育てのヒントや話し合いの新しい展開を得ることができる。合間にお茶の時間を入れると、ほっとした雰囲気を作ることもできる。

④要約とふりかえり

ファシリテーターは話し合われたことや活動を要約して伝える。出てきた話から、何をとるかはそれぞれ参加者の判断に任せるために、結論は出さない。

参加者に、セッションに参加して感じたこと、ヒントになったことなどを発言してもらう。あまり発言のなかった人にも興味のありそうなことで話せる機会を作るようにする。家に帰って実行してみたいことについても話してもらう。

⑤フォローアップ

二ヶ月後に電話を入れるなどして様子を聞き、必要に応じて対応する。

○留意点

① この懇談に参加して、なんとなく分かった、よかったとするのではなく、何を感じ何を得たのかを、最後に言語化することで自覚してもらうことが大事である。その上で、実行してみたいことも自分が表明することで、実行することにつながりやすくなる。

② 結果から何をとり、何をするかについては個人が選ぶことであって、発言においても強制しないことが必要である。

③ファシリテーターは参加者に付き添う人であり、参加者を中心に据えて指導的にならないよう、気をつける必要がある。
参加者が話しやすい雰囲気をつくり、一人ひとりの話をよく聴くことが大切である。耳で聞くだけでなく目でもからだでも、こころでも聴く姿勢が求められる。

④聴くことが中心ではあるが、合間に自分の経験が役に立つと思われるときには、話しても構わない。ヒントや情報を提供するとしても、結論や答えをだすことは控える。

⑤ファシリテーターは、自分自身のあり方が問われる立場であることを自覚して、つねに研鑽を積むことが求められる。

5）父親支援プログラム

父親支援プログラムとしては、「父子体験プログラム」「父親サークル活動支援」「父親の育児座談会」の３つを提案している。ここでは特に、「父親の育児座談会」について例示する。

＜父親サークル活動支援＞

○実施方法

①対象

ひろば利用者の夫のみならず、地域の子育て家庭に呼びかける。あまり対象を限定しすぎず、夫婦の参加も可能にするような呼びかけの方が望ましい。また、最初からサークル活動の呼びかけをするのはなく、親子バーベキュー大会や、親子で遊ぶ企画など、誰でも参加しやすい企画からはじめるとよい。ただし、この企画の中核となる父親コアスタッフを置くことによって、後のつながりを生み出しやすい。

②日時・回数

最初は、家族参加のお楽しみ企画であるため、季節ごとのイベントからはいめるとよい。その家族イベントから次第に父親サークルの芽が生まれたら、サークルとしての活動予定を作っていく。

もちろん、日時はサークルメンバーで決めればよいが、土日の月１回程度の活動が無理ながないものと考えられる。ひろばが空いている時間帯を活用するのもよい。

③募集方法

子育てひろばを通して、広く募集する。ひろばスタッフの夫や、中核となる父親コアメンバーの直接的な呼びかけなど、

知り合いからの声かけが最も効果的である。

④活動例

・子ども向けのお父さん劇団
・子ども向けのお父さんバンド
・絵本の読み聞かせ
・お父さんクッキング
・父と子の自然探索クラブ

⑤コーディネート

この父親サークル活動を支援するひろば担当者は、活動がうまく行われるよう側面的な支援を行う。具体的には活動の場の提供、サークル活動参加者募集の手伝い、活動の活性化の相談、他のサークルや関係機関との連携やイベント参加のコーディネート等がある。基本的にはサークルメンバーの自主的な運営が基本ではあるが、サークルが維持され、ひろばや地域、他の団体などとのつながりが生まれるような支援を必要とする。

○留意点

この活動を通して、父親自身が楽しめ、父親同士の交流の深まりが生まれることが大切である。また、父親だけが楽しむのみならず、子連れ参加原則で行うことにより、子どもにとっても楽しい時間が過ごせる工夫も必要となる。父親同士、父子の交わりを通して、父親が子育てを積極的に行うことの喜びを感じたり、父親としての役割意識を高めることが最も大切である。

さらに、この活動を地域の親子に発表するようなイベントを行うことによって、地域交流の活動にもなりうる。

この活動を行うことが、父親にとってだけではなく、子どもにとって、母親にとって、共に充実した時間となるよう留意する必要がある。子どもが退屈なだけの苦痛の時間を強いられたり、母親が子どもを見ている時間になるなど、父親の楽しみの犠牲にならないような工夫も求められる。

6）学生の子育て支援プログラム

学生の子育て支援プログラムとしては、「学生ボランティア」「学生の子育て家庭参加プログラム」「赤ちゃんとのふれあいプログラム」の３プログラムを提案している。ここではその中から、「学生の子育て家庭参加プログラム」を例示する。

＜学生の子育て家庭参加プログラム＞

○実施方法

①対象

子育てひろばにおいて、5 日以上のボランティア体験をしている中学生以上の学生。受け入れ家庭は、子育てひろばの利用者で、プログラムの趣旨に賛同する3 歳未満の子どものいる家庭。(できれば、学生が子どもに十分にかかわれる体験とするためには、子どもが２人以上いる家庭が望ましい。)

②期間・日時

５日以上、１日３時間～5 時間を目安とする。基本的には、１家庭に学生２人がペアを組んで行う。学生の経験や受け入れ家庭の状況によっては学生１人でも可能。夏休みや冬休みなど、学生の長期休暇の時期に定期的に行うことが望ましい。具体的な日時等は、子育てひろばスタッフが中に入り、学生と受け入れ家庭で話し合い、調整して行う。

③活動内容

学生は、決められた日時において、受け入れ家庭に入り、子どもと一緒に遊んだり、子どもの世話を行う。子どもとかかわることが中心となる。また、必要に応じて、食事の準備などの家事の手伝いを行う。

日常的なかかわりが中心とはなるが、学生自身が具体的にやってみたい要望、あるいは受け入れ家庭がぜひやってほしいと考えていることは、事前にしっかり打ち合わせを行い、互いが納得した計画立案を行うようにする。例えば、公園に行って遊ぶ、庭にビニールプールを出し

て遊ぶ、一緒に近くに買い物に行く等のプランが考えられる。

また、ちょっとした「託児」(30分～1時間程度）も可能である。ただし、これは学生と家庭相互の十分な理解とコーディネーターの十分な配慮の上で行うことが必要である。今後、このプログラムの発展形として、このような学生のベビーシッターが想定できるが、そのシステム作り（研修、認定資格、マニュアル作成、保険、バックアップ体制、責任体制などのルール作り等）が不可欠となる。

学生、受け入れ家庭共に一日ごとに記録を行うとともに、双方からそれぞれにコーディネーターへの簡単な報告を義務付ける。

④必要経費（省略）

⑤募集方法（省略）

⑥コーディネート

コーディネートは子育てひろばの担当スタッフが行う。基本的には学生数と家庭数を定め、募集を行う。希望者には、まずこの趣旨および具体的な内容等について説明を行う。

その後、学生および受け入れ家庭の希望や個性に合わせて、学生のペア（2人組）および学生と受け入れ家庭のマッチング（組み合わせ）を行う。これらのマッチングがうまくいくよう間をつなぐことが必要である。このペアを作る場合、大学生から中学生までの年齢差があるような場合は、少し離れた年齢同士をペアにするのも一案である。そうすることで、上の年齢の学生が下の子がうまく動けるように配慮する経験もできる。できれば、このペアは友達同士ではなく、新しい出会いの場とすることも有意義である。ただし、その場合、事前に親しくなるためのオリエンテーションの工夫が必要となる。

また、研修を企画し、そこでは学生および受け入れ家庭がプログラムの内容をしっかり踏まえると同時に、派遣当日が楽しみになるよう配慮する。学生と受け入れ家庭の打ち合わせの時には、簡単なお楽しみ企画を入れることも互いの緊張感がとれ、コミュニケーションを図る上で有効である。

学生のニーズや個性、性別、受け入れ家庭の子どもの人数や年齢、兄弟構成、父親のかかわりの多い少ない等を十分に把握した上でのマッチングが必要となる。このマッチングがプログラムの成否を握る部分もあるので、互いの情報収集および、それをもとにどのような組み合わせを行ったらよいかを十分に検討する必要がある。

⑦研修

学生がこのプログラムに参加するためには、研修プログラムを行うことが条件となる。（内容省略）

7）中高年世代との交流プログラム

中高年世代との交流プログラムとしては、「中高年者ボランティアプログラム」の提案を行った。概要は以下の通りである。

＜中高年者ボランティアプログラム＞

○子育てサポーター

基本的には、子育てサポーターとしてひろばのボランティアとしてかかわる。

実施しているひろばの内容にもよるが、日常的に親子がつどいあう場で、親の話し相手となったり、子どもと遊んだり、講座の際には保育を担当するなど直接的に親や子と関りあいながらのボランティアである。

○具体的展開例（省略）

○コーディネート

中高年ボランティアや交流がうまく機能するためには、ひろばスタッフによるきめ細かいコーディネートが大切となる。以下のコーディネートの視点が必要である。

・中高年者一人ひとりの思いやよさが生かされるような配慮。親子とつないでいったり、スタッフともつながりが生まれたりすることで、ひろばがそれぞれの居場所となるようにしたい。
・このような交流プログラムにおいては、親子にとっても中高年者にとっても、互いにとって恵みのあるもの（互恵性のある関係）でなければならない。例えば、親子にとってはしてほしくないようなかかわりや、中高年者の好意に対する親子の無自覚や無理解などもよくあることである。そのため、このプログラムをコーディネートする担当者は、両者の視点に立って、互いが満足できるよう関係をケアしていく必要がある。世代間の違いがズレとなるのではなく、違いへの理解へとつながるような努力が必要となる。
・基本的にはイベント化した交流ではなく、日常的に「～さん」と言った固有名詞で呼べる顔の見える関係であることが大切である。そうすることで、個々の個性が生かされ、本当の意味での交流を深めることになる。

○配慮点
・時代にあった子育て支援の知識や技量を再点検する必要もあり、講座修了者の導入が望ましい。
・ボランティア保険料、交通費等の予算化が望まれる。
・上記の点は地域のボランティアセンターなどと協働し、対応していくことも考えたい。具体的には個人としてボランティアセンターに登録をすることで、地域ボランティアの情報提供があるといったことと共に、ボランティア保険に自動的に加入するというしシステムをとっているボランティアセンターもある。そうした機能はぜひ活用していきたい。

8）アウトリーチプログラム

アウトリーチプログラムとしては、「子育て家庭訪問プログラム」および「広報活動」について提案を行った。ここでは、「子育て家庭訪問プログラム」について例示する。

＜子育て家庭訪問プログラム＞
○実施方法
①対象
子育てに困難な状況があると考えられる家庭。ふたご、みつごなどの多胎児家庭、子どもの健康や発達に困難があると考えられる家庭、年子や３歳未満の子が２人以上いる家庭、親の健康上に困難があると考えられる家庭、シングル家庭等が考えられる。
このような家庭を把握するためには、福祉保健センターや様々な関係機関との密接な連携が不可欠となる。
②訪問体制
子育てひろばスタッフが拠点となって行う場合、このひろばが地域の子育てコーディネーター的な機能を持つことが必要となる。地域の様々な関係機関と連携し、情報のセンターとなると同時に、最も必要な資源を提供できる能力が必要となる。そのため、このコーディネーターとなる人材として、十分にふさわしいと認められる方をあてる必要がある。
子育てコーディネーターは、地域の子育て家庭の情報を取得し、ふさわしい人材に訪問の依頼を行う。このふさわしい人材を得るためには、ケースに対応する上で最もふさわしい団体、サークル、グループとの協力関係が必要である。このような団体等とのネットワークがあって、はじめてコーディネーターの役割が成立する。ひろばがセンターとなり、多胎児サークルや、支援者サークル等のグループ作り、そのグループと連携しながら実施することも考えられる。
③訪問者
訪問者としては、保健師、臨床心理士、

臨床発達心理士、医師、保育士等の専門家がまず考えられる。特に困難と考えられるケースには、専門家が行うことが望ましい。

第二には、ひろばでの電話相談などを行う中で、訪問が必要と感じられた家庭に対して、ひろばスタッフが訪問するケースが考えられる。この場合、ある程度、事前にその家庭が抱えている課題が把握できていることが大切である。また、相談できる専門機関との連携も不可欠となる。

第三には、十分な研修をしてきた子育て当事者（先輩当事者も含む）が考えられる。例えば、多胎児家庭であれば、同じ多胎児の親が訪問するなどである。このような当事者が有効であるのは、被訪問者が安心して訪問を受け入れやすいという面がること、実感に基づいた共感的なアプローチが可能であることがある。ただし、専門家ではないため、相談や支援を行う上ではリスクも伴う。そのため、バックアップ体制を確立するとともに、訪問を行う上での研修を行い、基本原則をマスターする必要がある。（この研修プログラムについては別途、検討が必要となる。）

第四には、特に当事者ではないが、ボランティアを募集して行うことも考えられる。もちろん、この場合もバックアップ体制と十分な研修が必要である。

④訪問の実施要領

訪問者は、家庭を訪れ、まずはコミュニケーションをとることが必要となる。安心して話ができることからスタートする。安心感を持ってもらい、つながりを作ることが最大の目的となる。再訪問を受け入れてもらったり、ひろば等に行ってみようかなと思ってもらえるようにアプローチする。単にひろばに誘うよりも楽しいイベントに誘ったり、リサイクル用品を持っていくなどのアプローチも有効である。

また、何気ない会話を通して、子育て家庭の実態を把握することも行う。訪問がきっかけとなり、ひろば等に出てきてもらえれば最もよい。そうでなければ、再訪問を行ったりする。ただし、外に出てくることにあせるようなアプローチは禁物である。あくまでも、その親が必要としている支援に対して応じることが必要である。

⑤ふりかえり、フォローアップ

訪問の中で特に問題がありそうなケースについては、ケース会議（定期もしくは臨時）を通して、対応を検討する。そのため、ケース会議を行う組織作りが必要となる。その中には、スーパーバイザー的な存在を置くことが望ましい。

特に問題がなさそうなケースでも、再度訪問したりするなどのフォローアップする体制を作る。

⑥研修

研修には、以下の内容が必要である。

- カウンセリングマインド（傾聴のトレーニング等）
- 訪問にあたっての基本原則の理解（訪問での禁句、話の進め方、有効な言葉がけ、守秘義務、トラブルがあった場合の対応等）
- 対象理解研修（多胎児家庭、シングル家庭など、それぞれの家庭が共通に抱えている困難さについて理解するための研修）
- ケーススタディ（訪問時の様々なケースへの対応の仕方を検討する。）

○留意事項

- 訪問者は、その役割や身分が社会的に証明されるようなものが発行され、訪問時にそれを提示するようなシステムが必要である。
- 被訪問者がひろばに訪れてからの受け入れ体制や継続的につなげていけるような体制作りが不可欠となる。突然、被訪問者がひろばに訪れたとき、その必要最低限の情報を受け付けのひろば担当者が把握していることが望ましい。

・訪問に関する様々な留意事項は研修の中で具体的になされるが、特に守秘義務がともなうものであることの了解が不可欠である。

9）企業との連携プログラム

企業との連携プログラムとしては、企業内において、子育て中の世代や関心のある層が懇談する場を設置し、父親が子育てに主体的にかかわることの意義やその他た幅ひろく子育てを考える場を設ける以下のプログラムを提案する。

○実施方法

①対象

乳幼児期の子どもをもつ男女職員。又は子育てに関心のある職員。

②日時・回数

イベント的に開催することもあるが。年に数回、３回程度連続して行うなど、連続性がもてればなおよい。１回に２時間程度確保できることが望ましい。

③プログラム実施協力までのプロセス

子育て支援団体が各種企業に働きかけ、このプログラムの理解と協力を得る。当初はモデル事業として行うことや、企業における次世代育成の行動計画の中に位置づけるような働きかけを行っていく。「子育て家庭に優しい企業」「育児する父親にやさしい企業」といったものが評価されることによるメリットをともに考えアピールしていく。

大きな企業であれば社会貢献部といったセクションもあるかもしれないが、多くはそうした部や課がないこともあり、人事課や総務課といったセクションが対応することも十分考えられる。こうした活動自体がまだ社会的に認知されているとは言えず、どのようなセクションであれ、企業側の事情も十分考慮しながらコミュニケーションを綿密にもっていく必要がある。

④内容

子育て中の男女職員や、子育てに関心のある職員が集まり、子育てと仕事の両立についてや、地域と関わること、広く子育て一般についての懇談を行う。子育て支援者はそこにファシリテーターとして参加する。

初回はみなが参加しやすいように講義形式にしてもよい。

⑤テーマ

テーマにより参加者の興味も大きく変わってくるので、なによりみなが話し合いたい内容をまず知ることが必要である。具体的なテーマとしては、「育児と仕事の両立について」「時間の上手な使い方」「夫婦のコミュニケーション」「保育園や学童保育とどうつきあう？」といった気軽に参加しやすい内容とする。複数回継続していく場合には必ず参加者からの意見をもらいテーマに反映していく。

⑥人数

じっくり話を聞くためには、７～８人程度が望ましい。男女がある程度バランスよく参加するよう工夫する。

⑦進め方

・基本的な進行は外部子育て支援者のファシリテーターが行う。それが不可能であれば、職場内でのリーダーの参加を仰ぐ。その際そのリーダーとの子育て支援者が十分に事前打ち合わせを行い、参加者が気軽に、また本音を言いやすい雰囲気作りに配慮する。

・基本的な進め方は、４）親のエンパワーメントのグループ懇談の進め方を参考にする。

・初めに、自己紹介を兼ねて自分の子どもの特徴などを紹介してもらうなど、互いが相手のことを知り合い、参加者の緊張をほぐすことに努める。

・ここで話された個別のケースなどは基本的にはここだけの話としようなど、安心して参加し、発言できるような決まりごとについて確認する。そのほか、参加者が不安に思っていることなどを出してもらい、共通理解を行う。

・決めてあったテーマについて、思って

いること、困っていることを、話したい人から自由に話してもらう。できるかぎり、自分から主体的に話すように進行する。
・ファシリテーターは話し合われたことや活動をふりかえり、要約をして伝える。出てきた話から、何をとるかは、それぞれ参加者の判断に任せるために、結論は出さないが、課題があれば整理をしていく。

⑧展開例（省略）
⑨フォローアップ（省略）

○配慮点
・企業内でのことであるので、プライバシーの問題や一般職員にとって不利益などが起こらないよう、企業側とも綿密な打ち合わせが必要である。
・社会貢献部や労働組合等積極的に関わる部署とのつながりもふくめ、企業内にもキーマンが必要である。
・懇談会にかかわる子育て支援団体のスタッフはファシリテーターとして必要な高いレベルの研修を受けたものが望ましい。

10）ひろばでの相談

ひろばでの相談については、「相談の形態」「相談窓口」「相談内容の分類」「スタッフの研鑽」「支援者サポートプログラム」について整理を行い、その上で特別に「虐待予防のためのプログラム」の提案を行った。

＜虐待予防のためのプログラム＞
虐待というのは決して他人ごとではなく身近にも起こりうることであるという認識を、子育て支援に関るものとして、日頃からもつて臨んでいることが望まれる。
こころの問題というのは、専門機関にあがってくるまでに時間がかかる。虐待の場合、無自覚的にはじまって次第にエスカレートしていくことが多い。親が自分からサポートを求めることが少ないため対処が遅れて最悪の事態にもなる。子育てに自信のない親が増えていくなかで、潜在的に問題を抱えている家族を視野に入れた予防的な対応を考える必要がある。

○趣旨
ひろばは、専門の相談機関ではないので、病院や相談室のようなあらたまった雰囲気がない。スタッフやサポーターが相談員を兼任して、相談員のいる場所がスペースで、相談ができるライフ・スペース・インタビュー（生活場面面接）が主なやり方である。専門機関だと少し抵抗があり相談にいけない親でも気軽に話しができるため、問題の深刻化を防ぐことができる。
したがってひろば相談は基本的に予防的な役割を担っている。予防（日常生活）→早期発見→問題対応という見通しをもってひろば機能として位置づけたい。

○実施方法
日常的に心がける活動例を挙げる
①日常の援助的かかわり：
・一人ひとりの『常態』を支援者が共有できているか。
②カンファレンス（事例検討会）：
・臨床心理士等にスーパーバイザーとして同席してもらう。
③グループ・ワーク：
・予防的プログラム（前出のノーバディズ・パーフェクト・プログラム）
・問題対応的プログラム（レインボウ・プログラム）：心の痛みを回復し自己肯定感を高める。被虐待幼児から虐待の加害者である親まで、種々のレベルがある組織化されたプログラム。筆者らが実践・研究中であるが、虐待の連鎖を断つという意味で予防的観点から優れている。
④虐待予防に関する学習会・研修会
⑤講演会・公開講座等

⑥情報提供
・リソースを充分にもっていること
⑦他の機関・団体との連携
・情報や活動の共有、交換。
⑧巡回相談（臨床心理士等による）：
・気なる事例について相談。ふだんの様子を記録しておくとアセスメントに役に立つ。
⑨アウトリーチ

11）情報提供プログラム

情報提供プログラムとしては、「子育て情報ライブラリー」「転入・新米ママのための子育て事情講座（親同士の情報交換会」を提案している。ここでは、「子育て情報ライブラリー」を例示する。

＜子育て情報ライブラリー＞
子育てに必要な情報が、支援を必要とする子ども家庭にとどくための仕組みづくりがまず必要である。カナダでは親が訪れたドロップインでおよそ子育てに関する情報ならたいていのものが入手できるように、情報が一本化されている。親は多くの正確な情報を提供され、その中から必要な情報を自分で選択して決めることができるのである。日本の場合、地域には親が利用できる子育て関連の社会資源が数多くあるので、カナダ方式をとりいれるともっと小さな子連れで遠くまで足を運びにくい親が利用しやすくなる。

○実施方法
①他の機関・団体との連携
・情報の一本化は最も重要である。国、地方自治体、民間をとわず、教育・福祉・医療・・・等々、およそ子ども家庭支援に関連するすべての社会資源と繋げる。連携のかなめは、繋ぎ役としてのＮＰＯやボランティアである。
・事例を通して関係を広げたり、講座等で繋がる。信頼の上で情報を共有する。
②情報（データ）をストックする。
・子育てに必要な情報を幅広く集めて、少しづつ積み上げストックしていく。
・活動を通して得た情報も成果とともにストックする。例えば、次ページの『転入・新米ママのための子育て事情講座』の場合、企画・実践・検討・その他すべての成果物を情報（データ）としてストックする。
③フィルタリングする。
・複雑多様化する情報のなかから、どんな情報（判断材料）を正しく親に提供するか。これまで以上に責任が重い。
・本当に必要とする情報（判断材料）を親が選択できるように、支援者は専門的な知識が必要になってくる。
⑤情報の分類
・情報が多様になるほど、利用者は全体像が見えにくくなる。
・情報（判断材料）をわかりやすく提示。
・情報コーナー
・図書カードのようにファイリング
・その他
⑥考える情報（判断材料）を提供する。
・情報を提供し、選択し決めるのは親である。
・どれを選択するか。今まで以上に考えなければならない

12）児童館での支援プログラム

児童館での支援プログラムについては、「地域の子育て支援ネットワークの核としての機能強化」および「子育て家庭向け情報発信の強化」との観点から提案を行った。内容は省略する。

13）特別なニーズへの対応プログラム

特別なニーズへの対応としては、「心のバリアフリープログラム」および「シングルペアレントのつどい」を提案している。ここでは、「心のバリアフリープログラム」を例示する。

＜心のバリアフリー・プログラム＞

○趣旨

様々な親子が自由に集う「子育てひろば」には、これまで一度も障がいを持った子どもたちと出会ったことのない親が来ている。その人たちにとって障がいを持った子どもがそこに居ることや、自分の側にきた時とっさにどうしたら良いのかわからないという戸惑いがある。特に外見だけでは分り難い情緒障がいや広汎性発達障がいを持つ子どもの行動には、どう対応してよいのか、人々の受け入れ難い気持と戸惑いを隠せない表情に出会う。

ひろばに出入りする人々の様々な反応や事例を通し、「こころのバリアフリー」を実現するための取り組みを提案する。

○実施方法

①対象

ひろばに集まる親子、兄弟・姉妹

②広報活動・呼びかけ

パンフレット（写真・絵本、玩具など身近な環境整備とひろばの紹介）の配布

③開催のための準備

いろいろなハンディキャップをもつ人がいつでもひろばに来られるきっかけづくりとして「ふれあいの日」を設定する。

心のバリア・フリーをめざす関心の高い人たちが活動を準備することからはじめたい。障がい児・者を理解しているかその教育に携わった協力者がいることは、この活動を展開していく大きな力となる。近隣の保育所や幼稚園と連携して、子ども同士の交流から始める。ひろばに来る親子への啓蒙も大切な導入。小さい時からはじまる子ども同士の心のバリア・フリーは人の成長に大きな絆を生むと考えられる。

④活動の進め方と留意点

・さまざまなボランティアを導入する

場が設定されると各種のボランティアの申し出がはじまる。公的なボランティアのみでなく、個人のボランティアの申し出にも目を向けることが必要である。社会福祉協議会をはじめ遊びの紹介、子育て相談会、講習会の講師、以前に見学に来た子ども達が大きくなってボランティアとして活動してくれる。手芸、陶芸、手話、地域との連携は特別なニーズへの対応のみでなくひろばの成長に大きく貢献する。

・ハンディを持つ子どもの親と対話し、子どもの遊び相手になる

障がいを持つ子どもの家庭には、とくに心のケアと親の自己実現の場や時が必要である。障がいをもつ子どもの扱い方が難しいこともあって、親が子どもから瞬時も離れることが難しい。特定の場以外になかなか外出できない親子にとって、同じ年齢の子どもが集う場に入れることは得がたい機会である。それだけにスタッフの親へのかかわり方は、親のこころに安らぎを生み、子どもと親の心に寄り添うものでありたい。

・スタッフには専門性が求められる

ハンディを持つ子どもとのかかわり方は、容易ではない。どのようなアプローチが良いのかが問われる。ハンディの特徴を良く学習した上で、その子どもにあった遊具や援助また環境づくりを行うことが求められる。ノンプログラムとは、何も方策を持たなくてもよいということではなく、質的な力量が求められることを理解しなければならない。

14）支援者の研修プログラム

支援者の研修プログラムとしては、「スタッフ全体ディスカッションプログラム（みんなで話そう会）」「傾聴トレーニング（話を聴く・聴いてもらう）」「親と支援者とのロールプレイ」「ロールプレイー親グループの話し合い」の４プログラムを提案している。ここでは、「ロールプレイー親グループの話し合い」のみ取り上げる。

＜ロールプレイ　ー親グループの話し合い＞

○目的

ひろばでは親同士が出会い、それとないおしゃべりの中からお互いに学ぶことも多い。公園グループなどでは、一部の親のリードが強く、他の人が引きずられて言いたいことが言えない,どこに洩れるか分からないので、うっかりしたことが言えないなど、親しい間柄でも本音や深い話が話せないのが現状である。

ひろばにおいては,スタッフがいることで聴いてもらえるという安心感があり、親同士がグループで正直に話し合える設定もしやすい。研修としては、グループ懇談を想定して、スタッフがグループのファシリテーターを務めるために、スタッフ同士が親役を演じ、交代でファシリテーター役を練習する機会とする。

○実施方法

①５～7 人でグループになり、それぞれが、自分で想定する親役を演じるが、交代してファシリテーター役をとる機会も入れていく。

②まずファシリテーター役が参加する「親」たちに、取り上げて欲しいテーマをあげてもらう。テーマが集まったところで、参加者に話しかけてひとつのテーマに絞るための希望を聞く。一人ひとりの要求に耳を傾け、時間をかけて全員が納得いくテーマに絞るように配慮する。テーマを絞ることで、はじめからその話題に入りやすく,目的をもった話し合いになりやすい。

③話し合いを始める前に、気持ちをほぐすために少しからだを動かしたり、ゲームや自分の思いを入れた自己紹介などのアイスブレーカーを行う。ファシリテーターは随時交代してなるべく多くの人が経験するようにする。

④話し合いに入る前に、ファシリテーター役が、この場を安全な場にすることを約束する。そのほか各自が安全であるために、希望すること、避けて欲しいことを出しあって、皆で確認する。

⑤決まったテーマについての話し合いを行う。話したい人から自由に話してもらう。順番に話しをさせるとか、話しに参加することを強制しないようにする。話しを独り占めしたり、意図的に偏った方向にもっていく動きなどについては軌道修正を行う。基本的にはグループのみんなが安心して話し合いに参加できるよう、一人ひとりの様子に気を配る。話しに入りにくい人については、話しやすい状況やタイミングを見計らって話す機会を提供するよう配慮する。

⑥一区切りがついたところで、これまでのセッションのふりかえりをする。

⑦以下について、皆で考察を行う。

ⅰファシリテーショングループに参加した「親」として感じたこと

ⅱこのファシリテーションを親グループに用いるにあたって必要なこと,配慮することはなにか

ⅲファシリテーター役をやって、気づいたこと、反省点、グループを行う上でのメリット・デメリットなど

ⅳファシリテーション・グループに参加して、スタッフとして考えたことなど

⑧スタッフの次の集まりの際、ひろばで親との会話や、グループとの接触で気づいたこと、応用できたことについて話し合ってスキルアップにつなげる。

○留意点

①個人のプライバシーにふれることが多いので、出てきた話について、守秘義務を守る。

②職場としての上下関係があったとしても、研修の場には互いに対等な立場で参加し、発言しあうことが大切である。はじめにこれを確認しておくことで、強いものにひきずられたり、自分に不都合が生じるような発言ができなくなるなどの事態を避けることができる。これらが守られて、はじめて本音で話

しができるのである。

③ひろば等のリーダーや責任者は、こうした研修をスタッフに保障するとともに、研修をファシリテートできる外部からの講師を導入して、研修をより充実させる配慮をしていくことが望ましい。

3．支援者の研修

1）ひろばにおける研修プログラム

つどいの広場等子ども家庭や子育てを支援する活動が各地で広がり、多数の人々（スタッフ、サポーター、ボランティア等）が支援活動に携わっている。これら支援者たちは多種多様なバックグランドをもっており、資質、経験や知識、技能の程度もまた多様な人々である。一方でいま「ひろば」に求められているのは親の育児不安を軽減するだけでなく、親自身が子育てのなかで楽しみや喜びを深く経験しながら親も子も成長し、そのことがまた自分たちのくらしの中に還元され、地域全体の子育て力を培っていくようなひろば型支援のあり方である。

このような社会的なニーズに対応してひろば機能を十分に果すために、支援する側の組織的、体系的な研修システムを構築していくことが必要であると考える。

（1）ひろば型支援者の育成

ひろば型の支援とは「施設」を中心に、情報、もの、技術を提供する従来型の援助ではなく、それぞれの地域性、独特の文化に根ざして、地域住民・親子が主体的に活動を創り出していけるような援助をめざしている。ひろば型は、基本的にノンプログラムで、「ひろば」での過ごし方は参加者それぞれの自主性に委ねられる。スタッフ、支援者はまず親自身のリソース（資質や経験）を尊重し、必要なときに必要なだけの手助けをすることができる有能な見守り役であり、また親子がさまざまな人々との関係の中で自らの力で成長できるようにファシリテートする援助職でもある。

平成 14 年度に行なった調査によると運営主体や組織の規模によって、常勤・有給の保育士による専任スタッフから、非常勤・無給もしくは有償のボランティア・スタッフまで支援者の位置づけに非常に差が認められる。「つどいの広場事業」関連の施設のように資格要件が緩やかなところでは、就労経験や子育て経験者、子育て当事者など、対人的な専門職に限らず多様な資格や能力をもった人々が携わっている。このように一口に支援者といっても、そのバックグランドは種々さまざまであるが、子育て支援活動は今後ますます複雑化多様化することが推測され、それらに対応した支援職としての専門性が求められてきている。人材育成は時間を要するものであり、日常的な活動を通して人材が育つ仕組みをつくっていくことが重要であり、研修プログラムの作成もその一環である。

（2）研修プログラムの作成

現任の支援者を対象としたニーズ調査において支援者に求められる資質・技能として、①子ども理解に関する基本的な知識・技能、支援者個人の子育て経験や援助の姿勢　②カウンセリングマインド、リスニングスキル、グループワークの技法等、カウンセリングの基本姿勢や技術③家族問題に関する理解・援助技術（虐待や離婚ＤＶへの対応等）④その他：自己管理、支援者同士の連携・ネットワークの問題、地域理解や国の施策理解等が挙げられた。子育て経験や個人的資質、また知識より具体的な援助技術を重視する一方で相談対応として、問題の本質を見極めて抱え込まずに専門機関へつなげていく力量を求めている。

これらの結果を踏まえて研修プログラムの作成に当ったが、先ずひろばの基本理念に立ち返り、次世代を担う子どもの最善の発達を中心に据え、生涯発達の視点から親、子も支援者も共に発達しつつある存在であるという認識、根底に人間の尊厳・人権の意識をもった支援のあり方を主テーマとした。ひろばでこのような理念を具現化する人がひろば型ファシリテーターであると考え、スタッフ研修の基本プログラムとして作成、実施した。

2）ファシリテーター研修講座

「ひろば」のスタッフや支援者を対象とする研修プログラムの基本モデルとして、3日間・5コマ・12時間半の『ひろば型ファシリテーター養成講座』プログラムを作成し、約40名の現任の支援者およびボランティア等支援者予備軍に実施した。以下にその内容を概説する。

（1）研修プログラムのねらい

スタッフや支援者は、それぞれがファシリテーターであるという認識と力量をもって「ひろば」の活動に参与できるように、資質・技能の向上をめざす。ひろば型ファシリテーターとは、ひろばに参集するさまざまな価値観をもっている人々を繋ぎ、親子に安心で安全な場を提供し、一人ひとりの成長と同時に参加者全体の成長をファシリテートする役割を担う人（促進人）である。

①参加型学習方法を通して体験的に学ぶことの意味を理解する。

スタッフや支援者として、親と対等な立場にたち、指導者でなく援助者として、また共に学びあう人として、親や子どもに関わるとはどのようなことか、まず自らが一人の参加者としてグループ学習に参加し、体験を通して深く理解する。

②相談・面接力のスキルアップをめざす。

ファシリテーターはカウンセラーではないが、援助のための基本的な知識や技能を十分に身につけて「ひろば」の相談活動のなかで柔軟に応用できるように、また自分の力量を超えた問題に遭遇したときに適切に判断し、専門家・専門機関に繋げることができるようにカウンセリング的な援助理論や技法を学ぶ。

③支援者の自己理解を深める。

親や子どもに援助的に関わりエンパワーメントするためには、支援者自身も自らの心に向き合い、自らの課題を吟味し、エンパワーメントすることが大切である。研修プログラムの作成に当たって、もっとも大きな達成課題であり目標でもある。

（2）プログラムの構成

支援者研修に関するニーズ調査の結果を踏まえて5つの学習テーマから成る。各回を、ひろば型のファシリテーターの養成という、全体としてのテーマのなかに位置づけて、受講者がどのテーマの学習のなかでも、ファシリテーターとしてのマインドを自然に身につけることができように構成されている。

第1回は導入期として、ひろば型支援の意義や社会的役割など外的、社会的枠組みを明確にし、支援者ひとり一人がひろばのなかで、重要な役割を担っていることを認識する、支援者としての自己覚知の段階である。また研修期間、　学習を共にする仲間同士としての出会いを大切にしたい時期である。

第2，3，4回は研修の展開部分として、主たる課題を中心にとりあげ、援助技術の基本理論や知識が実際の援助場面での行動や気持ち、接遇のしかた等とどのように結びついていくのか、また人的環境を含めてひろば環境との関わり等を実践的に学ぶ段階である。

第5回は、研修の最終回として、それまでの研修のまとめとふり返りをする。支援者としての自己理解という、個人の内的理解を深める段階として研修プログラムの核心部分でもある。

（3）プログラムの進め方

参加型のグループ学習を効果的に進めるために、各セッション内の学習プロセスに配慮する。その他の留意点を挙げる。

☆グループ分け：日常とは異なるグループ体験や支援者同士の多様な出会いの機会を提供できるように編成を工夫する。

☆アイスブレイカー：新しい出会いの場面で互いに緊張を解し、グループ学習を円滑に進める上で役に立つアクティビティである。参加者の状況に応じて柔軟に考えてよい。

☆ロールプレイング：体験的学びの方法として研修場面では有効なアプローチであるが、課題や構成メンバーによって